

籾殻を使った野焼きによるテラコッタの協働制作

～2つの事例にみるアートと地域との連携の可能性～

Collaborative production of terra cotta by burning rice husks in the field

～the possibility of collaboration between art and the local community as seen in two cases～

しまうち みか

Mika SHIMAUCHI

崇城大学芸術学部デザイン学科非常勤講師 / 崇城大学芸術研究科美術専攻彫刻講座 平成25年度修了生

Part-time lecturer, Department of Design, Faculty of Art, Sojo University

The year 2013 graduates, Division of Fine Arts, Graduate School of Art, Sculpture course, Sojo University

キーワード：テラコッタ、野焼き、アートと地域、協働制作

Keywords: Terracotta, Open burning, Art and Local, Collaborative production of works

はじめに

稿者は2018年より、熊本県菊池市政策企画部企画振興課が運営する廃校を活用した施設である菊池市旧龍門小学校龍門地区活性化支援センター龍門アーティスト集合スタジオを拠点に彫塑作品等の制作活動を行っている⁽¹⁾。菊池市は、年間9,450トンもの収穫量がある菊池米、七城米などの米の産地で、燃料となる籾殻が調達しやすい上、広い農地があって火を使った野焼きが行い易いといった好条件を備えている。そこで稿者は、このような環境を生かした彫塑制作の方法として、特に野焼きを採用している。

稿者が籾殻を使用したテラコッタ粘土の野焼き法に出会ったのは、現崇城大学芸術学部長の恩師・勝野眞言教授が“大地のメモリア”展（熊本県津奈木美術で2016年に開催）において実施した住民参画型現代美

術プロジェクト「ひねってねじってぺったんこ！」に、野焼きワークショップのアシスタントとして参加した時のことであった。野焼きの協働作業時に地元住民と交流したことや、籾殻の入った外枠から作品を取り出す時に参加者との一体感や達成感が生まれたことなどが魅力的な体験として強く記憶に残り、卒業後も稿者が野焼きを続けるきっかけとなった。また、焼成によって生まれる作品のプリミティブな造形美も野焼きを続ける理由の一つとなっている。さらに稿者は、野焼きをする時に人々が火を囲むという、現代では珍しくなってしまった光景が生まれたことにも心惹かれた。現代では火が電気に変わり、生活から遠ざかって、火を見ることは非日常的な機会に限られる傾向にある⁽²⁾。野焼きをする際に火を焚くと自然と人々が集まり、知らない者同士が交流を始める場面に幾度も遭遇した。また、焼成用の土台となるコン

クリートブロックやレンガを運んだり、焼成するテラコッタ作品などを運んだりする協働作業の工程（図1）、火を焚く協働作業の工程（図2）などには、一種の祭りのような要素があるように稿者には思われた。火を中心とする協働作業がもつ一種の祭的要素に対する稿者の興味は、2021年6月～9月にかけて青森でのアーティスト・イン・レジデンスプログラム「ゆらゆらと火、めらめらと土」⁽³⁾における火に対する信仰や祭りに関する調査や、現地での野焼き時における地元住民との協働制作へと発展した。そこで稿者は、同要素が野焼きによるアートと地域との交流の根源にあると考え、稿者が行った野焼きによる制作と、制作を通してどのような交流が生じたかを本研究報告で整理しておきたい。

本稿では、まず「野焼き」について概説した後、2020年7月4日（土）～8月10日（月・祝）に公益財団法人東京都歴史文化財団東京都現代美術館主催の東京都千代田区にあるトーキョーアーツアンドスペース本郷で開催された「トーキョーアーツアンドスペースレジデンス2020成果発表展デイズチェーン」⁽⁴⁾に出品するために熊本県菊池市で制作した高さ2.4メートルの作品《自立について》（図3）（2020年、テラコッタ）の野焼きによる焼成と、それを契機に決定した青森県青森市の国際芸術センター青森アーティストインレジデンス⁽⁵⁾における地元住民とのテラコッタの野焼き協働制作⁽⁶⁾の2事例について報告する。

1. 「野焼き」とは

「野焼き」とは、焼成窯が考案される以前、人間が平地や窪みに薪や藁を積み上げ、その上に粘土で成形した器物を置いて、熾（消し炭）を使って野外で焼成する原始的焼成法である⁽⁷⁾。日本では、火の発見とともに、1万年以上前の縄文時代から、煮炊きをするための実用的な土器や実用の用途以外にも、人間や動物を象った土偶や土製品などをこの野焼きにより作ってきた。縄文土器は、700度～900度の温度で野天で焼かれた縄文時代に作られた素焼きの土器である⁽⁸⁾。

稿者が行っている薪と粉殻を用いたテラコッタ粘土の野焼きも、現代的にアレンジを加えてはいるものの、窯や電気を使わず、野天で天然材料の火力のみで焼くという点では大方同じ方法であると言える。焼成された作品表面には、橙色をベースに黒斑や、移り変わるベージュ色などのグラデーションが美しい紋様となって現れ、火の温度が自然の力で移り変わっていった痕跡を窺うことができる（図4）。粉殻を使う野焼きでは、粉殻が緩衝材の役割を果たすために作品を重ねることが可能であり、また、ゆっくりと火が移り回っていくため、温度が急激に上昇することもなく、穏やかに焼成できることが特徴と言える。さらに野焼きは、容易に入手できる天然の燃料で、広い場所さえあれば、難しい技術なしにどこでも実践できる優れた方法でもある。

2. 粉殻を使った野焼きの制作工程

本章では、粉殻を使った野焼きの制作工程についての概要を述べていく。

使用した材料

信楽粘土やテラコッタ粘土などの粘土、砂、粉殻 90 キロ、トタン板、なまし線、コンクリートブロック、レンガ、ハンマー、スコップ、軍手、水平器、ワイヤメッシュ、細かい目の金網、直径 10mm 程の鉄の支柱、燻をつくるための木材、着火剤、消火用の水、消火器、番線切り、金切バサミ

2.1. 原型の制作過程

続いて、上記の材料を用いて制作する方法について述べていく。まず、信楽粘土、もしくはテラコッタ粘土に、粘土をコシのある強い状態にするための素材である川砂を混ぜてよく練る。それは、砂を入れることで高さのある立体作品の制作が可能となるからである。原型となる粘土作品は、中が空洞になるように紐状に練った粘土（紐作り）⁽⁹⁾ を輪状にして積み重ねる輪積み⁽¹⁰⁾ 法をつかって制作する（図5）。粘土の種類により異なるが、乾燥すると 10% 程度収縮するため、それを予測しながら制作する。また、土と机の接着面に新聞紙などを敷いて、収縮時にヒビが入らないよう工夫する。ちなみに稿者は 70cm を超える立体的場合は分割して制作し、焼成後に接着するようにしている。粘土の乾燥時に生じる小さなヒビを修正したり細かいパーツを接着したりする際には、どべ（水と粘土をまぜて液状にしたもの）を接着面に塗り込むなどして、乾燥具合を調節しながら原型

を制作していく。成形後は、直射日光を避けて 2 週間ほど放置して粘土を乾燥させておく。水分が残っていると破裂の原因になるからである。

2.2. 焼成場所

次に、焼成場所の選択基準であるが、焼成中は煙が断続的に出るため、焼成場所は近隣に民家がない、広くて水平な地面がある場所を選択する。焼成中は、鉄の支柱を立ててトタン板の囲いを安定させるため、鉄の支柱を突き刺せるような軟度のある土の地面であることが望ましい。また、万一燃え広がってしまった場合に備えて、水場が近くにある場所を選択するか、消火器などを用意しておく。さらに、焼成前に消防署に野焼きの実施について連絡し許可をとっておく。

2.3. 外枠作りと土台作り

続いて、トタン板を巻いて円筒形を作り、それを燃料の粉殻を入れ込む外枠とする（図6）。円筒形の大きさは作品の量や大きさによって異なるが、稿者の 2 事例では、高さ 120～200cm、直径 90cm 程の大きさにした。ホームセンターでは大小さまざまなたん板が入手可能であるが、長さが足りない場合は、トタン板を重ね合わせて長さを補ってもよい。トタン板の外枠は、太さ 3mm 程度のなまし線を巻いて固定する。

次に土台作りに移るが、まずは地面の土をスコップで水平にする。それは、作品同士の重なり具合によっては、外枠に圧力がかかり、外枠ごと倒れる可能性があるからである。その後、環状列石のようにコンクリートブロックで環状の土台をつくり、ブ

ロックとブロックの隙間にレンガを置いて隙間を塞ぎ、地面と作品を入れた上部の粉殻部分との間に空間ができるようにする。次いでブロックとレンガの上にワイヤーメッシュを置き、さらにその上に粉殻が落ちないように細かい網目の金網を載せる。その際水平器を使ってもう一度水平を確かめる。なお、ワイヤーメッシュも金網も、直径 90cm の円筒形の積載が可能なサイズに、番線切りや金切鋏などを用いて事前にカットしておく。

2.4. 焼成

まず、既述の土台の上で木材を燃やし、火種になる熾（おき）をつくっていく。熾は、一度木材が燃え上がった後、燻って炭になる直前の状態がよい。次いで、その上を覆うように粉殻を載せ、粉殻の上に乾燥したテラコッタ粘土の作品を置いていくが、既に焼成が始まっているため、作品の挿入作業は手早く行う。また、作品自体の空洞部分にも粉殻を入れ、作品の内側にも火が回るようにする。粉殻とテラコッタをある程度積み上げた後は、それらを囲い込むように既述のトタン板製の円筒形の外枠を上から被せ、枠内にさらに粉殻を詰める。

その後、テラコッタを積み上げて粉殻の中に入れる作業から、テラコッタ粘土作品を粉殻のなかに埋没させる作業に切り替えていく。その際、作品をトタン板の外枠に触れるように入れてしまうと、粉殻の熱量不足で焼成不良になってしまうため、外枠から 15cm ほど内側に作品を配置するよう留意する。なお、縦方向にも作品を積載していくため、可能な限り下方に重い作品を

入れたほうがよい。続いて、トタン製の外枠が、燃える粉殻とそれに伴うテラコッタの焼成中の動きによってバランスを崩さないよう、鉄の支柱を外枠の周囲に立てて補助軸とする。円筒内に入れた作品の高さの約 1.3 倍の高さまで粉殻を入れた後は、そのまま放置し、1～2 日ほど焼成する（図 7）。その後、1 日程度放置して外枠のトタンの温度が素手で触れられる程度に下がったことを確認してから、取り出しを行う。それは、作品が冷え切っていないと、外気温との差で急激に作品の温度が変化し、ヒビ割れを起こしかねないからである。

2.5. 作品の取り出し

粉殻からの作品の取り出しは、まず、なまし線と鉄の支柱の取り外しから行う。粉殻が灰になって内部の堆積が減っているため、円筒内に積載した作品のバランスが崩れて外枠に荷重がかかっている場合があるため、円筒枠を開く際は手を添えながら慎重に行う（図 8）。開いた後は、上方の作品から順番に慎重に取り出す。輪積み作品は、輪と輪の接合部分が構造的に弱く、作品の上部から摘むように持ち上げると輪と輪同士の縁が切れて外れてしまうこともあるため、作品は下部から庇うように持ち上げて取り出す。また、焼成の際に外れてしまった細かいパーツが粉殻の灰のなかに紛れていることがあるため、灰のなかを手探りしてそれらを探すようにする。

なお、粉殻の灰は、保水性や通気性、排水性に優れており、根菜類を作る畑の土壌改良用の肥料としても使用できる。また、トタン板やブロック、レンガ、支柱なども繰り返し使用できることを付言しておく。

3. 事例紹介

3.1. 熊本県菊池市における野焼き（2020年）

続いて、稿者が実施した野焼きの事例を挙げる。1例目は、2020年6月6日～13日にかけて、熊本県菊池市旭志町の鳥取孝治氏の農園で行った野焼きである。焼成したのはトーキョーアーツアンドスペース本郷で行われた展覧会に出品するための2.4mのテラコッタ作品《自立について》である。重量のある同作品の焼成場所を鳥取氏の農園に決めたのは、①稿者の制作場所である菊池市旧龍門小学校龍門地区活性化支援センター龍門アーティスト集合スタジオ（以下龍門アーティスト集合スタジオ）に距離が近かったこと、②焼成時に煙が出て周囲に影響しない広い土地であったこと、③鳥取氏が美術に対して理解があり、以前から龍門アーティスト集合スタジオで稿者含むアーティスト達と交流があったこと、などが理由として挙げられる。協力者は主に、恩師の勝野眞言教授や、同じ龍門アーティスト集合スタジオに入室しているアーティスト、鳥取氏の農園関係者、稿者の活動に興味をもった熊本市民や菊池市民ら8名であった。

3.1.1 制作工程

制作工程は以下の通りであった。なお、野焼き期間のみ天候を記入した。

4月初旬	龍門アーティスト集合スタジオでテラコッタ粘土による原型制作を約2ヶ月間行い、乾燥させた。
6月5日	作品移動させるための木箱を作り梱包した。

6月6日（曇時々雨）

10:00～ボランティア・スタッフと、龍門アーティスト集合スタジオから作品を焼成場所の菊池市旭志町まで移動させた。

11:30～焼成場所の地面を水平に均したが、土が硬く人力では難航したため、鳥取氏が農業用の重機で耕作して下さる。トタン製円筒を作り、作品を開梱した。

13:00～木材に着火し、熾を作った。

14:00～熾の上に粉殻を敷き、その上に置いていった。その後トタンの外枠を被せ、補強のための鉄柱も沿わせ、円筒の中に作品と粉殻を入れて埋没させた。梅雨時期であったため、雨よけの屋根もつけた。

15:30～作業終了後、地域住民と交流した。

6月7日（晴れ）

午前と午後の2回、野焼き場所を偵察し外枠のトタンの高さ半分程度まで燃焼したのを確認した。

6月8日（晴れ）

午前中と午後の2回、野焼き場所を偵察し、外枠のトタンの高さ高い位置まで燃焼したのを確認した。

6月9日（晴れ）

午前中と午後の2回、野焼き場所を偵察し、粉殻が燃え尽きているのを確認し、熱を冷ましながら天気と人手の都合でそのまま数日放置した。

6月13日（曇時々雨）

作品の取り出しを行ったが、灰になった粉が雨水を吸収して重さを増して作品を圧迫したため、作品に割れが生じてしまっていることが判明した。作品取り出し後、道具を撤収して菊池市龍門アーティストスタジオへ運び、作品を修正して完成させた。

3.1.2 野焼き時の地域との交流

焼成前の作品が大型で重量があり、稿者一人では運べなかったため、6月6日、近

隣の住民が出してくれた車や、アーティストスタジオのアーティストの車など数台で作品の運び出しを行った。野焼きの土台作り時には、農園の持ち主が農業用ユニックで水平をとるアイデアを出して協力して下さったほか、雨除けに使用可能な波板も貸与して下さるなど、アーティストと地域住民が互いにアイデアを出し合って作業を進めた。また、焼成時に火の番をしていた際には、稿者を含めた野焼きメンバーに加え、田植えをしていた農園関係者やそのご家族、好奇心から見学にきた菊池市の飲食店関係者や畜産業者など約20名が集まり、周辺の自然や植物、昆虫などについて語り合うことで、情報や知識を提供してもらい、菊池市に対する親しみがさらに深まった。

さらに、菊池市には美術系の公立施設がなく、美術館等に足を運ぶことに馴染みのない住民も少なくないが、住民との交流のなかで、野焼きのプロセスや、自然環境や持続可能な社会、菊池市の地域の街づくり、さらには、アーティストが何を考えて制作しているのかなどが話題にのぼり、地元住民の関心事についても知る事ができた。

なお、焼成場所を提供するという事は、相手を信用した上でリスクを共有することでもあるため、そのような理解者を見出すことは容易ではなく、菊池市における野焼きの焼成場所探しは、周辺住民の理解を得ることが厳しく難くなった現代では極めて困難なことであった。さらに新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、人々が集まる事が難しかったこともその困難

を増幅させた。そのような中で、鳥取氏は稿者を信用して理解を示して場所を提供して下さったわけであり、同氏には改めて感謝の意を表したい。

3.2. 青森市国際芸術センター青森 ACAC における滞在制作プログラムによる市民参加型協働制作の野焼き（2021年）

続いて、稿者が国際芸術センター青森 ACAC のアーティストインレジデンスで行った2例目の市民参加型野焼きの協働制作について挙げる。稿者は同アーティストインレジデンスに参加した際、青森市民との交流を深めるためにも協働制作⁽⁸⁾という形で野焼きするよう提案され、それを実現させた。協働制作では、地域住民はアーティストの制作過程を共有することで作家の考えを深く知り、アーティストと共に達成感を味わうことができる。また、アーティスト側も協働制作プログラムを通して地域住民と関わることで地域を知り、地域資源を生かした新たな作品を生むきっかけを得ることができる。アーティストインレジデンスでは、市民参加型協働制作プログラムは、実施例が少ないプログラムの一つである。

ところで、稿者は、野焼きを通して火に対する信仰や祭りに興味を抱いていたため、青森でのアーティストインレジデンスを利用して、国内最大級の火祭りである青森のねぶた祭や、山岳信仰にまつわる火に対する信仰などの踏査も行った。さらに、2021年7月に世界文化遺産に登録された三内丸山遺跡（青森市）をはじめとした「北海道・北東北の縄文遺跡（青森市）」や縄文土器、遺跡群等の踏査も行ったが、こう

した青森での祭りや土器、遺跡との出会いは、その後国際芸術センター青森展示室 A で開催した個展「ゆらゆらと火、めらめらと土 SHIMAUCHI Mika “Quivering flames, ardent earth.”」(図 9) に出品した野焼きによるテラコッタ作品《My Alter》(2021 年、テラコッタなど)(図 10) に反映されることになった。

協働制作プログラムでは、最初のサポーター・ミーティング(図 11) と呼ばれる会合から制作風景の見学や野焼き、作品の取り出し、展覧会のオープニングトーク時に至るまで、何度も地域住民と顔を合わせた。参加者は、大学生(青森公立大学の経営学科と地域みらい学科の学生)や、AIRS(アーティスト・イン・レジデンス・サポーターズ) と呼ばれる国際芸術センター青森のボランティア組織のメンバー、青森市の縄文土器や美術自体に関心をもつ住民などであった。

なお、青森では、テラコッタ粘土のほか、青森で採れた土も使用した。焼成は青森県青森市合子沢国際芸術センター青森の敷地内で行った。

3.2.1 制作工程

制作工程は以下の通りであった。なお、野焼き期間のみ天候を記入した。

6月13日 自己紹介を含めたサポーター・ミーティングを行った。国際芸術センター青森 ACAC のスタッフがフライヤーやホームページ等で協働制作参加者を募った。
6月下旬 国際芸術センター青森 ACAC 制作棟でテラコッタ粘土による原型制作を行った。制作棟に地元住民などが見学に来

て交流した。

7月15日 国際芸術センター青森 ACAC のスタッフとボランティアとでトタン製外枠を作った。

7月16日(晴れ) :市民参加型野焼きの協働制作
10:00~参加者が全員国際芸術センターACAC 制作棟に集合し窯作りをするグループと、乾いた小作品を段ボールに詰めて運ぶグループの2班に分かれた。

11:00~地面の水平をとるために地面をスコップで耕作した。

11:30~木材に着火し、熾を作った。

12:30~熾の上に粉殻を敷き、その上に作品を置いていった。その後トタンの外枠を被せ、補強のための鉄柱を沿わせ、円筒の中に作品と粉殻を入れて埋没させた。梅雨時期であったため、雨除けの屋根もつけた。

14:00~作業終了後、協働制作参加者と交流した。

7月17日(晴れ)

午前と午後の2回、野焼き場所を偵察し、外枠のトタンの高さ半分程度まで燃焼したのを確認した。

7月18日(晴れ)

午前中と午後の2回、野焼き場所を偵察し、粉殻が燃え尽きているのを確認し、熱を冷ました。

7月19日(晴れ)

協働制作参加者と作品の取り出しを行った。焼成中に一度も雨が降らず、空気が乾燥していたため、高温で焼成された作品の表面は明るい橙色となった。青森で採取された土は、鉄分が多いため焼成後の作品は他の粘土で制作したものより赤くなるが、普段使用する信楽粘土やテラコッタ粘土との違いを実際に確認することができた。作業終了後、参加者と交流した。

3.2.2 青森の地域住民との交流

青森での野焼きの協働制作に対しては、青森県内から15件の問い合わせがあり、そのうち実際に野焼きの協働制作に参加したのは8名であった。本企画は、国際芸術センター青森が企画して参加者を募集したものであったため、元々美術に興味のある参加者が集まった。参加者のなかには、滞在制作の様子の見学から野焼き、展覧会開催時のオープニングトークに至るまで、幾度も国際芸術センター青森ACACまで足を運んで関心を示してくれた人もいた。

野焼きを実施した7月16日は、屋外の炎天下での作業であったため、熱中症に気をつけながら休憩をとりつつ行った。参加者は当初、面識のない者同士の共同作業や、焼成前の粘土作品を運ぶことに緊張していたようだったが、作業を通して次第に打ち解けていったように思われる。作品の取り出し時には特に盛り上がり、粉殻の灰の中から作品が出てくると歓声が上がった。「発掘調査をしているみたいだね」と作業の楽しさを語る参加者もいた。また、陶芸教室での陶芸制作経験のある参加者は、野焼きのプロセスを知って、陶芸に対する学びがいっそう深まったと語っていた。

さらに、野焼きが粉殻という天然の燃料のみで焼成することに驚いたという声も多かった。参加した青森公立大学の地域みらい学科の学生は持続可能な社会について興味を持っており、野焼きが少ないエネルギーで焼成できることに感心していた。参加者はいずれも青森市在住者で、年齢や性別は皆まちまちであったが、彼らの中には共同作業を通して新たな交流が生まれてい

た。

さらに、野焼きの前後に、青森県五所川原市にある株式会社津軽金山焼の工房を訪れて青森で採取された土を頂き、その土も使用して制作を行った。工房を訪れた時に粘土の性質等の情報交換も行い、野焼きを通じてアートと地元工芸家たちとも交流することができた。

また、焼成後に生じた灰は、菊池におけると同様に、畑を所有する参加者に分配した。

滞在制作者として他県から来て、青森の特徴的なモチーフである岩木山の鬼や、北東北の縄文時代にしばしば見られる十字型板状土偶などからインスピレーションを受けて制作した稿者の作品は、同地域の住民には新鮮に映ったようだが、これらの作品は、野焼きの協働制作の参加者から教えられた東北の火にまつわる伝承や縄文文化、青森の文化資源に関する情報がきっかけとなって生まれたものであった。

4. おわりに

以上、稿者が実施した2つの野焼きの事例を紹介したが、それらに共通して生まれたアートと地域との関わりは以下の3点である。

①協働作業を通じての仲間意識の発生

2つの事例は、アーティストである稿者が主導するプロジェクトであったため、地域住民はそのサポーター的存在であり、地域住民自身が主体的に活動するものではなかった。しかし、野焼きという共同作業を通して達成感の獲得や仲間意識の発生はど

これらの事例においても参加者間に共通して生じており、創造的な共同作業には住民同士をつなぐ力があると言えるように思われる⁽¹¹⁾。野焼きの工程の中でも、特に一緒に火を囲むことや、重量のある作品や道具を運ぶ共同作業、また皆で創造物を作りあげることには、「祭り」の過程を連想させる要素がある。祭りの一連の過程と類似した作業工程にこそ、仲間意識や一体感が生まれる仕組みがあるように稿者には思われる。

②領域横断

熊本県菊池市での1つ目の事例では、農家（土地の所有者）やアーティスト、大学教授、飲食店主など、さまざまな職業、年齢の人々が野焼きに関心を寄せ、サポートして下さった。また2つ目の青森県青森市での事例においても、美術に関心のある人々がボランティアとして集まった点は異なるものの、参加者の年齢や職業が多様であったことは共通していた。すなわち、いずれの事例においても野焼きの協働制作には、「農業」、「SDGs」、「陶芸」、「美術」、「地域」といったそれぞれの関心や所属領域を越境して融合しうる可能性があるように稿者には思われた。もちろんアート自体に領域越境的、横断的な性格、性質はあるが、特に「野焼き」の特徴である「火」、「屋外での作業」、「協働作業」といった祭的要素は、領域を越えて一つにさせる可能性を秘めていることを稿者は実践を通して実感したのである。

③制作と交流を通してのアーティストと地域住民の相互作用

稿者は2つの野焼きの協働制作を通し

て、いずれにおいてもアーティストと地域住民たちとの間にプラスの意味で相互作用、影響があったと考えている。具体的には、アーティストは、野焼きの協働制作によって地域と交流し、その交流から地域についての認識を深め、新たなインスピレーションを得て作品を制作することができた。他方、地域住民側は、アーティストの制作をサポートすることで美的体験を共有しただけでなく、住民同士が新たに結びつき、仲間意識を発生させ、自分たちの地域を見直す機会を得たと言える。

稿者は、自身の活動拠点である地域に作品を見て欲しいという思いから、地方都市である熊本県を拠点に制作活動を行い、アートイベントも企画してきた。具体的には、菊池市の市民参加型の生涯学習センターでのアートイベント「第3回菊池アートフェスティバル」（2019年）、熊本市蔦屋三年坂店でのトークイベント「自由になるためのアートミーティング」（2019年）を実行委員として企画し、拠点である菊池市龍門アーティストスタジオでも公開制作やオープンスタジオなどを行って、アート作品やその制作、展示を通しての地域との交流に取り組んできた。しかし、完成した作品と鑑賞者という従来の接点では、美術に関心のある人々とは交流できるが、関心のない人とはいつまでたっても交流は生じないと思っていた。それに対しテラコッタの野焼きによる協働制作は、地域住民との交流のために企画したものではなかったにもかかわらず、思わぬ交流を生じさせた。稿者はそうしたアートの新しい側面に気付かされるとともに、自身が活動する地域に

ついて、より深く認識させられるに至ったのである。

熊本県菊池市の事例は、アーティストである稿者が制作を目的として作業する中で、図らずも住民との間に交流が生まれたのであったが、今後は地域との結びつきや交流を目的とした制作を行うことも可能だと考える。そこで稿者は今後、2つの事例における体験や気付きを通して、作品制作だけでなく、交流を目的としたワークショップや体験を共有する活動を自身の住む地域でも行い、自身の住む地域と互いに影響を及ぼし合いながら、制作活動を続けていきたいと思っている。

地方都市には、都会にある真っ白な壁のコマーシャルギャラリーや美術館が数多くあるわけではないが、手つかずの自然や端然たる田畑や森林、野焼きのできるような広々とした土地など、豊かな天然資源がある。それゆえ稿者は、その土地土地の特色を反映したアートと地域、並びにアートと地域住民との新たな結びつきの可能性を、制作を通して探っていきたいと考えている。

【註】

(1)同校は2013年に閉校したが、その後も同所では菊池市地域協力隊や地元住民らによるアートフェスティバルが行われている。2018年からは市の運営するサテライトオフィス、アーティストスタジオとして活用されている。菊池市公式ホームページ「熊本県菊池市廃校活用事例資料 癒しの里菊

池」https://www.mext.go.jp/content/20200917-mxt_sisetujo-000001234_2.pdf（令和2年9月15日菊池市 政策企画部 企画振興課）

- (2)大塚伸一『火の神話学 ロウソクから核の火まで』平凡社 2011年10頁8行
- (3)公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館主催の展覧会「トーキョーアーツアンドスペース レジデンス 2020 成果発表展 デイジーチェーン Part 1」は、東京都千代田区にあるトーキョーアーツアンドスペース本郷にて2020年7月4日から8月10日まで行われた。
- (4)国際芸術センター青森 ACAC 主催のしまうちみかの滞在制作プログラムは2021年6月上旬から9月中旬まで行われた。同期間中にしまうちみか個展「ゆらゆらと火、めらめらと土」SHIMAUCHI Mika “Quivering flames, ardent earth.” も2021年7月31日から9月12日まで行われた。
- (5)国際芸術センター青森（ACAC）は、青森市市制100周年記念事業として設立され、2001年12月に開館したアーティスト・イン・レジデンス（滞在制作、AIR）、展覧会、教育普及を3つの柱として、現代芸術の多様なプログラムを発信するアートセンターである。同センターは、表現者の創造的活動の支援、優れた芸術の発信、活動が生み出すつながりによる国際的ネットワークの構築、市民や学生とアーティストの出会いや表現・学びの機会の提供などを通して、地域内外へと波及する文化芸術の創造・発信の中心（センター）であることを目指している。国際芸術センター公式ホームページ <https://acac-aomori.jp/about/>（令和3年11月1日）

しまうち みか： 粉殻を使った野焼きによるテラコッタの協働制作～2つの事例にみるアートと地域との連携の可能性～

- (6)しまうちみか公開・協働制作「野焼き」 SHIMAUCHI Mika co-production “Open burning” (2021年6月～7月)は、しまうちみかが近年取り組む「野焼き」を、協働制作および公開制作として行ったもので、野焼きの一連のプロセスを地域住民とともに行った。
- (7)「陶芸三昧」ホームページ『陶芸用語大辞典』 <http://www.tougeizanmai.com> (令和3年11月1日監修：岡本立世、取材協力：株式会社アルボル)
- (8)岡村道雄『縄文の生活誌』講談社学術文庫 2008年 55頁
- (9)紐作りとは、粘土で紐を作り、底面とした粘土の平面の周囲に、それを巻き上げるように積み上げていく成形技法。
- (10)輪積みとは、土器、陶器などの製作法の一種で、粘土の紐を積み上げていく成形技法。
- (11)谷口文保「第4章 コミュニティー形成を支える」『アートプロジェクトの可能性 芸術創造と公共政策の共創』九州大学出版会 2019年 109頁

参考文献 (刊行順)

- ・太田博太郎・山根有三・河北倫明『原色図展 日本美術史年表』集英社 1992年
- ・斎藤忠・吉川逸治『原色日本の美術1 原始美術』小学館 1993年
- ・岡村道雄『縄文の生活誌』講談社学術文庫 2008年
- ・大塚伸一『火の神話－ロウソクから核の火まで』平凡社 2011年
- ・井口直司『縄文土器ガイドブック－縄文土器の世界』新泉社 2012年
- ・谷口文保『アートプロジェクトの可能性－



図1 焼成するテラコッタ作品などを運ぶ協働作業



図2 野焼きの火を焚く工程 (2020年)



図5 紐状に練った粘土を輪状にして積み重ねる輪積み法をつかって制作する様子



図3 トーキョーアーツアンドスペースレジデンス 2020 成果発表展「デイジーチェーン」出品作品《自立について》テラコッタ粘土 (東京都本郷)



図4 籾殻を使用した野焼きで焼成したテラコッタ粘土の表面

しまうち みか： 粉殻を使った野焼きによるテラコッタの協働制作～2つの事例にみるアートと地域との連携の可能性～

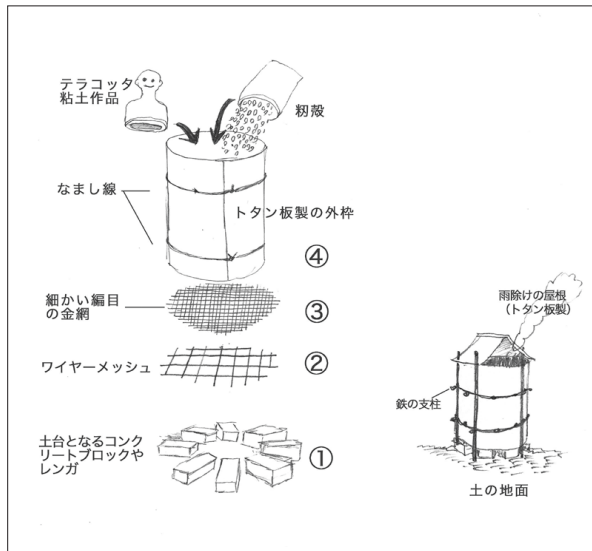


図6 外枠作りの工程



図9 国際芸術センターでの個展と協働制作の案内についてのフライヤー
「ゆらゆらと火、めらめらと土 SHIMAUCHI Mika “Quivering flames, ardent earth.”」



図7 焼成時の様子 着火後1～2日放置



図8 焼成後、トタン製の円筒を開く際の様子



図10 インスタレーション作品《My Alter》
(2021年 テラコッタ等)



図11 サポーター・ミーティングの様子 (協働制作についての説明会)

